
stopper ~ 転生者の戦い ~

追憶の俺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

stopper 転生者の戦い

【Nコード】

N5830Z

【作者名】

追憶の俺

【あらすじ】

10000ユニーク突破記念！

神のミスでなく普通に死んでしまった一人の少年、秋原 一途。

彼は天使と共に「リリカルなのは」の世界へ行く……転生者の世界の破壊を止める為に……stopper 転生者の戦い 始まります
ハーレムや管理局アンチが好きな方は「もどる」推奨します

prologue

……俺は死んだ

何故死んだかって？それは普通に学校から家に帰ってる途中、トラックが突っ込んできて普通に死んだ。かわすなんてできる訳が無い。恐怖して動けなかったからさ

ところが今、俺は真っ白な空間にいる。ここが死者の国、すなわち天国だとしたら「どんだけ寂しげなところなんだよ」と思う

「おや、また死人が出たか」

何所からか声が聞こえる。てかまた死人って……言い方がなあ

「ああ………すまない」

「うおっ！？」

突然黒い服を着た歳二十代半に見える長身の男が隣に現れる

「ろつとお！驚かせてしまったようだな」

「そりや突然横から出てきたら驚くわっ！？」

それにしても何なんだコイツ……あれ、どっかで見た様な顔だな

……
ひょっとして……？

「まあ君の考え方は間違っていないんじゃないかな。私はルシフェル、神に仕える天使だ。ようこそ天界へ」

え、今「天界」って……

「ああ、『天界』さ」

「へえ……此処が天界……てか心読むなし」

「ふふつ、天使だからといって、侮ってもらっちゃあ困るね」

……下手したら発言が変体にしか思えないんだが大丈夫なのか？

「大丈夫だ、問題無い」

……大問題だな、こりゃ……

「それで、君はこれからどうするんだ？このまま死者の国に逝くか、『転生者』として世界を破壊するか……」

二つ目の言葉でルシフェルの顔が不機嫌そうになっているのが俺には分かった

「世界を……破壊……？」

「ああ……そうだ。『転生者』は私利私欲の為人知を超えた力で

世界を荒らし、自分の思いのままに世界を変える……最近こうゆう自己中心的な奴等が増えてね。天界でも問題になっているんだよ」

「!?!」

俺は驚愕した

そんな奴等が世界を破壊……しかも自分の為に……

俺は腹が立つて自分の拳を握り閉める

それを見たルシフェルは驚いたような顔をしていた……そんなに驚いたのが可笑的いか?

「……ああすまない。ちょっと驚いてしまったね。実を言うと君も転生して世界を破壊すると思っていた……こんな私を、許して欲しい」

「いや……ルシフェルは何も悪くないよ。俺は……その自分勝手な転生者に……何もできない自分に腹を立てているんだよ……!」

「……なるほど、君は少し変わっているようだね」

「……そうか?」

「ああ……とってもね……なってみないか?

stopper《止める者》に……」

……ん?すとおっぱ?栓になれと?

「まあそんなところか。君には『世界の栓』になつて欲しい。こんなヒトを見たのは私も久しぶりだからね……君には『魔法少女リリカルなのは』の世界に行つて、転生者の暴走を止めてもらいたい」

『リリカルなのは』……テンプレだな……

「転生者の暴走を止める……か……まあ出来るとこまでやってみるか」

「ふふつ、有り難う。では君には世界を護るための力を授けよう……」

ルシフェルは指を鳴らすと、三種の武器が現れる

まさか『神パッチン』を間近で見れるとはな……

「……そういえば、君の名前を聞いてなかったな」

「ああ、そうだな。俺の名前は……」

あきはら
秋原 一途さ

これが、俺とルシフェルの出会いの始まりだった

「これはヒトには決して作ることのできない神の知恵、いや……武器か」

「これが……俺のチカラ……」

次回、一途の『チカラ』
T A K E
O F

prologue (後書き)

はい、遂に投稿しました！！次回もお楽しみに！！

prologue? 一途の『チカラ』(前書き)

原作まで時間がかかりそう。どうぞ

prologue? 一途の『チカラ』

「……………」

「これは神が造り出した知恵……いや、武器か」

俺は言葉を失った。なんかすげえ『神聖』な感じがする

「君には最初に『アーチ』の説明をしよう」

と、弓のような武器に指をさす

「『アーチ』、人類が決して辿り着く事の出来ない神の叡智として神が我々に与えられたものだ。先ずは広げてみるか」

と、真ん中の部分が伸びる

「ふふつ、見ての通り継ぎ目すらない美しいフォルムだろう? 14000年前にアイツがこの武器をよく使っていたね」

「……アイツ?」

「そう、確かアイツの名前は『イーノック』だったな。まあ良い奴だったよ」

良い奴だったって……死亡フラ……

「心配するな、アイツは今でも生きているよ。説明の続きをしよう……神はこれを爪楊枝に使っていると噂を聞くが……私はそんな

ところは見た事もないし、信じがたいね」

あ、俺もそれ思った。爪楊枝つてなあ……なんだか使い辛そう

いつの間にか無意識に『アーチ』に触れようとしたその時

バチィっ!!

「うおっ!？」

突然の出来事だったので手を引つ込めてしまう

「ろつと!驚いたか？」

「ルシフェルも驚いているじゃんよ」

「ははっ、これにはなかなか慣れないからね。これは人が言う電気でもレーザーでもない。いわば神のみが造り出せるエネルギー体だ。気を付けろ、触れると一瞬で浄化されてしまうぞ」

おお……浄化なんてしたら元も子もないからな……

「これは君にやろう。上手く使いこなせよ」

「!良いのか……いや、有り難うルシフェル」

「ふふっ、そろそろ魔力の方も与えないとね。タカト、手を出し

てっちゃん?」

ルシフェルの言うとおりに手を差し出す

「……………この者に……………世界を守護する『チカラ』を……………」

すると突然俺の手……………いや、体全体が青白く輝く!!

「な!?!」

「それが、君の『チカラ』だ」

「これが……………俺の『チカラ』……………!」

「これが人間界に繋がる扉だ」

目の前に在るのはよく解らない字が刻まれた巨大な扉……………でけえ

「……………開け」

突然、扉が開いたので俺は下がる

「さ、行こうか」

「え、ルシフェルも一緒に……ちょ、腕引つ張……あああああ
あああああああああああ………」

俺は再び見る地上へと降りた……

「此処が『リリカルなのは』の世界……」

「ふっ、また面白いことに……なりそうだな」

次回、『出撃』 TAKE OF

prologue? 一途の『チカラ』（後書き）

はい、遂に『リリカルなのは』の世界に来ました！

次回もお楽しみにっ

人物紹介だが、大丈夫か？（前書き）

短いですがどうぞっ

押し絵追加しました

人物紹介だが、大丈夫か？

秋原 あきはら たかと 一途 享年15歳

容姿は茶髪、茶眼と普通

stopper《止める者》

神のミス……ではなく、普通にトラックに撥ねられ死亡

『リリカルなのは』の世界に往き、転生者の暴走を止める為に戦う
イメージ画（生前）

>i37523—4701<

ルシフェル 年齢不詳

熾天使 セラフィム

『El shaddai』に登場するルシフェルと同一人物

一途を『リリカルなのは』の世界へと導いた神の使い。 stopper《止める者》の統率者

以後、一途を影でサポートするようになる

年齢は不明だが、天地創造の頃から生きているらしい。時間を自由自在に操る事が可能

イーノック 年齢不詳

エルダー評議会書記官

ルシフェルが言っていた14000年前の『アイツ』

所有していたアーチ、ガーレ、ベイルはルシフェルに返却している

人間ではあるが『天界の力で加齢しない』為、15000年は生きていくらしい

昔、堕天使を人間界から連れ戻し、『大洪水計画』から人々を護った事があった

現在、旅をしているそうだ

人物紹介だが、大丈夫か？（後書き）

現時点ではこんなもの。でわでわ

chapter 01 『出撃』と『転生』（前書き）

明日で学校終わるZEE!どうぞっ

chapter 01 『出撃』と『転生』

ルシフェルに『チカラ』を貰った俺は……

「あああああああああああああああつー!!」

只今、落下中で御座います　って、ホントにヤバいだろうっ!?

「はっはっはっ、大丈夫だ」

おいおい……そっぴやなんか体の調子が……変っていつか……

「ああ、転生する時は歳が0に戻るからね。その所為なんじゃないか？」

よく見れば自分の体が縮んで……

「嘘だろおおおおお……」

そのまま俺は意識を失った……

■

「……タカト、ヒトが持つ唯一絶対の『チカラ』、それは自らの意思で進むべき道を、『選択する』事だ。君は世界にとって最良の未来を想い、自由に選択していけよ……」

私はそう言い、タカトと共に落ちていく……『海鳴市』へ

「ふっ……また、面白い事になりそうだな……『イーノック』……」

旧友の名を呼び、六枚の羽根を広げる……アイツは元気にしているかな？

■

「……き……る……」

……ん？此処は一体……

「どうやら、私達は無事に『海鳴市』へと辿り着いたようだ」

「ここが……『リリカルなのは』の世界……」

と、起き上がろうとするが、体が動かなかった

あれ……何で……

「ふふっ、これを見てごらん」

何処からか鏡が現れ、俺の顔を映す

な……

「おぎやあああああああ！？（なんじゃこりやあああああ
あああっ！？）」

「ははははっ！まあ、可愛いんじゃないかな？」

うぐう……まさか……本当に『赤ん坊』になるとは思わなかった
ぞ……

「さ、私達の『家』に行くか」

「うー？（え、家あるのか？）」

「まあね。此処に来たときに用意しておいたんだよ」

へえ、準備が良いな……って……

「あばぶっ！？（なんでおんぶしているんだよっ！？）」

「まあ、良いんじゃないか？つと、着いたぞ。此処が私達の『家』
だ」

見た目は何処にでもある普通の家だな……

「入るか………私だ。居るなら返事をしろ」

……おい、誰もいんじゃないか？

そう思っていたら、誰かが玄関に来た。この人たちは……

「久しぶりだな……」ルシフェル」

「あら、そこにいる可愛い子はだれかしら？」

「紹介しよう、君の新しい『家族』だ」

次回、『アザゼル』と『エゼキエル』 TAKE OF

chapter 01 『出撃』と『転生』（後書き）

はい、今回は無事家に着くまでの話を書いてみました。次回もお楽しみに！

chapter 02 『アザゼル』と『エゼキエル』（前書き）

……

アザゼル「……」

一途「何やってるんだ？」

モンハン3G

アザゼル「ふむ……やはり進歩というのは素晴らしいな……」

一途「はぁ……んじゃ」話目どぞ

chapter 02 『アザゼル』と『エゼキエル』

「誰か居るんだろ？居るなら返事をしろ」

すると誰かが玄関に来た

「……久しぶりだな、ルシフェル」

「あら、貴方だったのね。その可愛い子は誰かしら？」

男性の方はルシフェルを見て嬉しそうだ。もう一人の女性は俺に興味があるらしい

「ばぶう？（ルシフェル、この人は？）」

「男性の方は『アザゼル』、かつて堕天使グリゴリの統率者であり、セムヤザの右腕

女性の方は『エゼキエル』、人限界の母性愛に興味を持って、それが原因で一度墮天している」

「彼等は捕縛すべき七体の魂の一つだった……と言っても14000年前の話なんだけどね」

へえ、この人達が……てか、若すぎないか？

「まあ罪を償って天使に戻ったからね……
一応紹介しよう。彼等が君の新しい『家族』だ」

「……でも良いのかしら？人間を育てても……墮天してしまうんじゃないか？」

「心配無いさ、天界の制度が14000年で変わらないと思っただか？」

そう、14000年前に多くの天使が墮天した理由……その頃は余りにも天界の制度が厳しかったのも理由の一つとして挙げられる

「今は一番上の神が変わったからね。
まあ私の上司なんだけどね」

……マジか

「と、言う事で……あとは頼んだぞ？
私は報告書を書かなくちゃいけないからね」

と、指を鳴らして何処かへ消えた……この二人が……新しい両親……

一途が後ろを向くと……

「ふふっ、これから宜しくね」

エゼキエルが笑顔でこちらを見ている。いや、凄い綺麗なんだけと同時に凄い怖い

逃げようとするが……体が動きません。だって0歳だもん

……アザゼル、たすけ……

「すまない、こうなると止められんのだ……」

逃げるようにその場から立ち去る

ちよ、エゼキエル、やめ……

「ばぶうううううっ!!!(アザゼルウウウウウっ!!!)」

新しい家族が増えたのは嬉しかった。だが精神がすり減るのが唯一のデメリットかな……

「さてそろそろ始めるぞ。『模擬戦』を」

「さあいくぜ!」

? S t a n d b y r e a d y . s e t u p : ?

次回、『模擬戦』 TAKE OF

chapter 02 『アザゼル』と『エゼキエル』（後書き）

エゼキエル暴走、アザゼルも手をつけられないという（笑）

次回もお楽しみに！

chapter 03 『模擬戦』と『黒い俺』（前書き）

アザゼル「……作者、切れ味が下がった。引き付けておけ」

へいへい任せなさい

一途「何またゲームやってんだよ……どうぞ」

chapter 03 『模擬戦』と『黒い俺』

あれから4年の月日が経った……え、飛ばしすぎだって？……ごめんそれだけは暖かい目で見逃して欲しい。3年間もあんな事してたら恥ずかしくて死ぬよ。

今は体が自由に動くから体力を付けるため、ジョギングをしてる。折角力貰ったのに3年も動いてないしここ周辺の把握も兼ねてね

とは言え、無理し過ぎても駄目なんだよな。まだ子供なんだし

？マスター、最近独り言が多いですが何かありましたか？？

「いや、何でも無い。悪いな、グレース」

？いえ、マスターがそれで宜しいのなら私からは何も言うことはありません？

碧色の球体が点滅しながら言葉を発する。

この球体の名前はグレース。四回目の誕生日に貰ったデバイスだ。貰ってから何時も持ちあるいている

？マスター……また独り言を……本当に大丈夫ですか？？

「大丈夫だ、問題ない」

そんなやり取りをしながら自宅に向かう。因みに今は朝の6時で周りには人一人いない

まあ人に見られたら問題なんだけどね……

「ただいま」

「お帰りなさい、お腹減ったでしょ？さ、ご飯出来たから食べましょ」

「食べる前に手は洗うのだぞ」

「うん母さん、父さん」

こんな感じで俺達家族の朝が始まる……

一応エゼキエルとアザゼルにも人間の名前がある。真愛母さんと、進父さんだ。

そっぴや、敬語とか天使に一切使ってないんだよね。大丈夫かな……？

（大丈夫だ、問題無い）

……なんか声が聞こえたけど気のせいだね、多分

「ご馳走様でした」

「……食べ終わったか。そろそろ『模擬戦』をやるつか」

「！？アザゼル、まだタカトには早いんじゃないあ……」

「大丈夫だ、タカトは最近頑張ってるしな。もう良いんじゃない

か？」

「そ、そうかしら？」

「危なくなったら私が止めに入る。それで良いだろう？」

「まあ、……それなら大丈夫ね」

あのー……俺を置いて話しないで欲しいなー……

「すまないなタカト、さあ行くぞ」

い、行かつて何処へ……

その瞬間、俺と父さんの体が一瞬にしてこの部屋から消えた

■

ん……此処は……？

「此処は私達のいる世界とはまた違う空間と言ったところか」

見渡す限り何もない真っ白な空間

「さて……始めるか、『模擬戦』を」

そう言って現れたのは真っ黒な『俺』……だった

「こいつは『大量のケガレ』を取り込んだタカト……つまり『裏のタカト』と言っても良いな」

と、黒い俺が弓状の武器を構える。あれは……『アーチ』か？

「そう、『ケガレ』を溜め込んだアーチだ。だがお前にも対抗策はある……先ずは武器を奪え」

アサゼルの言っていることは何となく分かる。でも俺に『アレ』が出来るのか？

「何をもたもたしている。敵は目の前にいるぞ」

黒い俺がもう目の前に迫って来ていて己の『得物』を振るおうとしていた

「っと！ グレース、初の模擬戦だ。宜しく頼むな」

それをバッグステップでかわし、自分の愛機に声を掛ける

？ Yes、マスター？

「っし、いくぜ！ グレース、セットアップ！」

？ Stand by ready・set up？

俺の言葉にデバイスが答え、碧色の魔力光が俺の体を包みこみバリアジャケットを展開する

「……これが俺のバリアジャケット……」

白を基準としたコートの様な衣装に黒のジーンズ……あれ、なんか『一番良い装備』意識してないか？まあいいや

そして俺のデバイスの『グレース』は首に掛かっている

「先ずは相手の武器を奪う……サポート頼むぜ、グレース」

？了解、マイマスター？

さあ初の戦闘の始まりだな……

そう思い、一途は構える。沸き上がる恐怖を噛み殺して……

chapter 03 『模擬戦』と『黒い俺』(後書き)

デバイスは基本日本語です。次回もお楽しみに

chapter 04 『クリスマス』と『転生者』（前書き）

クリスマスという事で！

どぞっ

chapter 04 『クリスマス』と『転生者』

「ふう、やっと終わったよ」

膨大な量の書類を終えたらしく、黒服の男……ルシフェルは一息付く

「さて……始末書も書き終えたし、人限界へ行くか」

六枚の純白の羽を広げ、再び彼は地上へと降りる……この先の出来事を知らずに……

■

「ふふっ……此処を見るのは3年ぶり……か。

随分街が賑やかだな……ろっとお、世の中はクリスマスか」

そんな事を呟いていると、銀髪のおッドアイの少年が私の前に現れる……

「？ 私に何か用か？」

「お前には消えてもらう……『堕天使ルシフェル』さんよ……」

「！ ……私の存在を知るとは……残念だが、私は堕天使ではなく熾天s「うるせえ！」……人の話を聞かないか」

彼が突然剣を構え攻撃してきたので、私はそれを受け止める

「!？」

「此処での戦闘は目立つ……場所を移そうか」

そう言い、私は指を鳴らすと共にその場から彼と消えた

「……！ 此処は……」

「即席で創った空間だ。来るが良い……『転生者』」

「いくぜ……『フリーダム』！」

？マスターの仰せのままに……？

と、彼の手に剣が現れる

？Excalibur？

「消えちまいな！……約束された勝利の剣!!」

彼は『聖剣エクスカリバー』を振るい、光の斬撃を放ち眩い光で私を覆う……

だがそんな他かが99%コピーの神造兵装など……

「それで私に勝ったつもりか？」

「！？ そんな馬鹿な！？」

「何を驚いているんだ、君達人間の攻撃等……私には一切通用しない」

そう……私の体には傷一つ付いていないのだから……

「さて、次は此方の番だ。手短に終わらせる」

そこで取り出したのは、一本の爪楊枝

「お前……馬鹿にしているよな………！」

すると、爪楊枝が白く輝く

「クリスマスプレゼントだ。……君はちゃんと受け取れるか？」

私はそう言い、爪楊枝を投げた……

投げた爪楊枝は加速していき、やがて凄まじい速さで風と光を纏いながら、『目の前の標的』に向かって翔んで行く……

「馬鹿に………するなあああ………」

『熾天覆う七つの円環………！』

光で出来た七枚の花弁が彼の前に展開される。

あれは確か、『使い手から離れた武器に対して無敵という概念』
を持った盾だったな。まあ……神の力を持つてすれば……

「！？ な、そんな……」

全てが『無』に変わるー

展開された花弁が割れていき……

「嘘だああああああああ！！！」

眩い光と共に大気を震わす大爆発を起こし、彼を捲き込む

「流石、『世界樹』から創った爪楊枝、美しいだけでなく、素晴らしい強さを誇る」

そんな事を言っていたら彼の姿が無かった……逃げたか

「まあいい。さて、プレゼントを買いにいくか」

私は指を鳴らし、人間界へ戻った

■

「ちきしょう……覚えていやがれ……この『宮沢 優里』が必ず
消してやるからな……ハ、ハハハハハハ……」

ボロボロの少年は、そのまま何処かへ消えた……

■

「はぁ……はぁ……」

「ふ、そこまでだな」

アザゼルがそう言う

模擬戦の結果はボロ負け。武器を奪うことすら出来なかった……
うー……なんか悔しいなあ……

「まあ初めてにしては上出来だろう。そろそろ戻るぞ」

「う、うん」

初の戦闘は終了し、自宅へと戻った

「「ただいま」」

「やあ、3年ぶりだな」

「ルシフェル！」

自宅に戻ると、ルシフェルがいた

「ふつ、今日はクリスマスだからね、プレゼントを買ってきたんだ」

あ、そういや今日はクリスマスだったな。忘れてたよ

「エゼキエルにはコートを」

取り出したのは温かそうな毛皮のコート

「まあ……有り難う」

「アザゼルにもあるぞ」

「ほう……何だ？」

取り出したのは……

「ニンテ。ドー3。Sだ」

「……………」

俺と父さんは思わず絶句した……げ、ゲームかよ……

「……ふむ、まあ受け取っておこう」

まあ嬉しそうだし良いか

「ルシフェル、貴方もクリスマスだし今日は家に居たら？」

「ふふっ、そうさせてもらっよ……それじゃあアレを言おうか」

その言葉に全員が頷く。もうアレしかないよね

「「「「「メリークリスマス!」」」」」

一日中、俺達はパーティで楽しんだ

「そういや、良い忘れてたが……………」

「ん?何何?」

そしてルシフェルが放った言葉は……

「ついさっき、神になったんだよ」

え……………

M
A

Z
I

K
A

chapter 04 『クリスマス』と『転生者』（後書き）

ルシフェルマジチート（笑）

次回もお楽しみに

人物紹介が大丈夫か？ パート2（前書き）

人物紹介2ですっ

人物紹介が大丈夫か？ パート2

神代 かみしろ 一途 たかと 4歳

秋原から神代へ名字が変わった。新たな家族と共に日常生活を送っている。魔力光の色は碧色

希少能力……『浄化』

『ケガレ』を溜め込んだ武器を浄化し、本来の強さを回復する能力。但し消費魔力が多い

勿論、『ケガレ』が無い武器に対しては無意味

デバイス『グレース』

名前の由来は『神の恵み』

4歳の誕生日、アザゼルから貰った

独り言が多い一途の心配をしている

ルシフェル

つい最近神になった神代家の居候

恐らくこの物語の中で最強

能力

・『神力付加』

あらゆる物質に『神力』を付加させ、通常の武器とはとんでもなく懸け離れた性能を発揮させるチートの能力

・『神の衣』

『下界の人間の攻撃』が一切通用しないチートの能力。全ての神は常にこれを纏っている

・『時間操作』

時間を止めたり自由に他の時代に行ったりする事が可能

宮沢 優里

銀髪ロン毛のオッドアイでチート転生者。『f a t e系の武器を創造できる能力』が使える

ルシフェルに喧嘩を売った挙げ句返り討ちに逢い、神力付加した爪楊枝を喰らい瀕死になった馬鹿である

敵と判断したら即『約束された勝利の剣』を使ってしまう

アザゼル

一途の父親、『神代 進』でもある

名前は『進』步、『進』化から

容姿は30代とやや若いめの墮天前の姿

エゼキエル

一途の母親、『神代 真愛』でもある

名前は純『真』な『愛』情から

一途の『黒歴史の3年』を作った張本人

容姿は20代前半と墮天前の姿なのでとても綺麗と評判らしい

ちなみに名字の神代は『神』に『代』わる者に由来

s h a p t e r 0 5 『リベンジ』と『浄化』と『アーチ』（前書き）

何故かonly my railgunとラストエンゲージ聞きながら書いてました。関係無いのに

どぞっ

Chapter 05 『リベンジ』と『浄化』と『アーチ』

「さあ、いくぞ？」

「うん」

クリスマスから数日……俺と父さんはまたあの空間にいた。そう、前回のリベンジを果たすためだ

勿論、目の前には黒い俺がいる

「また頼むよ？ グレース」

？何時でもokです。マスター？

「セットアップ！」

？stand by ready・set up？

俺はまたあの時のように、バリアジャケットを展開する

「……」

無言で此方に斬り掛かる黒い俺

俺はただ必死にそれをかわす……こいつ、遠慮というのが無いのかあつ！？

？無駄ですマスター。彼には私と違い『意志』が無いのですから？

「えっ、お前……意志があるのか？」

？ええ、私は『インテリジェントデバイス』ですから？

「は、はあ……確か意志が無いデバイスって……『ストレージデバイス』だっけ？」

？はい、その通りです。さあこんな無駄話はやめて、戦闘に集中を？

「お……おあ……」

怒られた……まあ、その通りだな

俺は黒い俺の動きを見ながらかわす

動きを見て、攻撃をかわして、見て、かわして……の繰り返しだ

しかし……

「……………！」

「うわぁっ!?!」

向こうも此方の動きに合わせて攻撃をしてきたのだ。恐らく動きを読まれたのだろう

「マジかい……っと、おわぁっ!?!」

前転してかわして立ち上がる前にもう次の攻撃が来る

綺麗に前転する事も出来ず、体を投げ出すようにして避ける

さっきの攻撃でかすりではあるが腹を切った

しかし、痛がっている暇はない。既に黒い俺が目の前にいたのだから――

「……………」

そして、黒い俺の剣が降り下ろされた――

「っ！ タカト！？」

アザゼルが一途の側に行こうとするが――

「……………！？」

「へへっ、次はこっちの番だな」

一途がその黒き剣を両手で受け止めていた――

「白羽取り……………！？」

思わずアザゼルも驚いていた

「そら……………よおっ！！」

「！！？」

不意を取られたのか、黒い俺は動けなかった。チャンスと思った俺は、そのまま黒い俺の武器を蹴り上げた

そして、天空に舞った黒き武器は……

「よつと！ お前の武器を奪ってやったぜ！！ 父さん！ こっからどうするの！？」

俺の手中に収まった

「ふつ……強くなったな……そのまま、武器を『浄化』しろ。お前になら出来る、タカト」

「！ ああ、分かった！！」

そして俺は黒く濁ったこの劔に手をかざし、力を注ぐように先端までスライドさせる――

「はあああああ………！！」

キュイイイイン………

そんな音が武器の色が変わると同時に空間に鳴り響いた

「これが……『アーチ』……」

白く輝き、フォルムは継ぎ目すら無く美しいものであり、弓と思われても可笑しくない湾曲した『神の劔』……『アーチ』が今、一途の手に在る

「『浄化』……『ケガレ』を溜め込んだ武器を清め、本来の力を回復させる神の力……上手く使いこなせば転生者と渡り合える事が可能だ」

「『神の力』……か」

驚いてばっかだな、俺

そう思いながら、自身の劔を構える

さあ、セカンドバトル第二試合を始めようか！

一途は、再び戦場へ躍り出た

新たな力と共に――

「ふふふっ……見つけた……『堕天使ルシフェル』」

「はぁ……見ろ、また奇妙な奴が出てきたぞ？」

「つと、間に合ったか」

次回、『決着』と『助っ人』 TAKE OF

Chapter 05 『リベンジ』と『浄化』と『アーチ』（後書き）

次回もお楽しみにっ！

chapter 06 『決着』と『助っ人』（前書き）

助っ人登場！ どぞっ

chapter 06 『決着』と『助っ人』

「はああああっ！」

一人の少年は自分の劔を慣れない手付きで振るい、目の前の『黒い自分』に向かって斬りつける

しかし、その攻撃は簡単にかわされる

「……………」

そして、その『黒い自分』は手から黒い弓状の劔を現出させる

「な…………さつき奪ったのにまた出すのかよ!？」

？ですがマスター、『アーチ』を創り出すのは相当な魔力を消費します。攻めるのなら今です？

「っし！ ならいくか!!」

両者共に、劔を構え敵に向かって突っ込んで行く

刹那、二人の劔が火花を散らしながら混じりあう

「っ！ やっぱり体が四歳じゃあ、キツいな……………」

「……………」

疲れているのが顔でわかる一途に対して、黒い一途は変わらず無表情である

「あいつ……疲れて無えのか……」

？いえ、彼も限界な筈。一気に叩きましょう？

そんな事を話していたら、黒い一途に剣で押し返されてしまった、そしてまた黒い剣が今にも一途を切り裂かんとしていた

「っ！ やべ……」

思わず目を閉じてしまいそうになるが――

？Air leap？

そんな電子音が聴こえ、気付けば向こうの攻撃を回避していた

「！ グレース……お前……」

？諦めないでくださいマスター、サポートは私がやりますのでマスターは今やらなければいけないことを？

「……………！ 今俺がやらなきゃいけないこと……有り難うな、グレース。

さあ、いくぜえ！！」

？Yes マスター？

今俺がやらなくちゃいけないこと……それは――

目の前にいる俺（敵）を倒す！！

今度は一途から攻撃を仕掛ける

「たあああつ！！」

「……………！！」

黒い一途もそれを防ぐ様に劔で牽制する

「もうお前の動きは……………分かってるんだよおつ！！」

一瞬の『スキ』を捉え、一途は相手の劔を斬り上げる

？今です、マスター？

「はあああつ！！」

？Air real？

蒼く輝く弧を描きながら、相手を斬り上げ、ジャンプする

「……………！！？」

「これで最後だつ！……………喰らいやがれええええつ！！」

？Spin lush？

瞬時、空中から高速回転しながら黒い一途にアーチを叩きつけた

「……………」

地面に叩きつけられた黒い一途は何も言わずに、消えていった……

「お……………おえええええ……………」

？……………大丈夫ですか？ マスター？

「大丈夫じゃない、問題……………」

恐らく、さっきの『スピンラッシュ』のせいで酔ったのか、一途の顔は真っ青である

「……………ふつ、今日はここまでだ。帰るぞ」

「う……………うん……………」

？……………折角勝ったのになんか残念ですね？

■

「……………ただいま……………」

「お帰り……………って、どうしたのタカトー！ 顔が真っ青よっ！？」

母さん、凄え心配してるな……こりゃ今日は駄目だな……

「…………アザゼル」

「……………っ!？」

その場を立ち去ろうとしていた父さんに、母さんがドスの効いた声で話しかけた……あ……これは……

「何でタカトがこんな事になっているのかしら？ 貴方が無理させたのでしょうか？」

顔は笑ってるけど……母さん、怒ったら凄え怖いんだよな……

「ま……まで。私はタカトにそんな事は……」

「そう言っつて、また逃げるんでしょう？ 少し、O H A N A S H I しましょうか」

「は、H A N A S E ! タカト、助け……………あああああ
あ……………」

「ごめん、父さん。母さんには逆らえません

その夜、アザゼルは一人で何か呟いていた……………

翌日

「ん…………ふぁ……………」

よく寝た…………なぁ…………

「やぁ、おはよう」

「ルシフェルか…………おはよう」

そう挨拶を交わしジャージに着替える

「ふっ、またジョギングか？」

「まっ習慣だからね」

そう言って俺は家を出る

「私も付いていくよ」

「うおっ！？」

いきなり横からルシフェルが出てくる。黒いジャージを着ていた…………普通の人間にしか見えないなぁ

「ふふっ中々な物だろう？ さて、行く「ふふふ……………見付け
たぜ…………『堕天使ルシフェル』」…………また君か」

「！？ ルシフェル、あいつは……………」

「転生者だ…………それも、チートのね」

！？

……こいつがチート転生者か……

俺は身構える

「……へっ、こんな餓鬼も転生者なんだな。丁度良い……纏めて消してやるよ……なあ、速水」

「へマしたらお前を殺すからな……」

纏めて……消すだと！？

「見ろ……また奇妙な奴が出てきたぞ」

「まずは……転生者であるあんたに消えてもらっ」

彼らは武器を何時の間にか構え、俺の前にいた……

っ！！体が動かねえ……このままじゃ……

目をつむって覚悟を決めたその瞬間――

「まてええいつ――」

横から棍棒のような何かが俺の前に出された

「――！？」

「……………邪魔が入ったか」

そう言い彼らは舌打ちをする

でもこの人は……

「助っ人参上、間に合って良かったよ」

彼はそう言い、俺の前に立った

「こいつには、指一本触れさせない。stopper? 止める者? としてな!」

chapter 06 『決着』と『助っ人』（後書き）

新キャラ登場！名前は次回明らかに！！

お楽しみに！

chapter 07 『もう一人のstopper』と『諦めない』口（前）

一途「明けておめでとうございます」

新キャラ「今年も宜しく！」

一途「……出てきて良いのか？」

新キャラ「大丈夫だって！　すぐ分かる事だしさ」

ルシフェル「……ふっ、それではchapter 07、始まるぞ
？」（指パッチン）

chapter 07 『もう一人のstopper』と『諦めない』

「こいつには、指一本触れさせない。stopper? 止める者? としてな!」

突然目の前に現れ、俺の前に立った人は髪と瞳の色は黒で、青色の武闘家が着るような薄手のバリアジャケット

そして彼の右手には『棍棒?』が握られていた……しかし、背の高さは俺と同じくらいだ

「ちっ……stopper? 止める者? か……速水、撤退するか?」

「……いや、『このまま』こいつらを消す。ルシフェルも含めてな」

「!? くっ……」

俺は自分の無力さに腹が立った。折角、体力付けたり特訓したのにチートな力をもった奴等の前『無意味』なんだ

さっき、奴等の前に怯えて動けなかったのが何よりの証拠だった

畜生……『無意味』だったのかよ……!

そう思いながら、俺は地面に拳を入れる

「……くそっ!」

？マスター……？

「ははははあつ！！ 所詮は『臆病者』かあ！ いいぜ、こいつを殺したら次は『お前』だからなあ！！」

銀髪のロン毛がそう俺に言い、劔を黒髪の男に構える

「……………」

あいつの言っている事は間違っていない。膨大な魔力の前に、今だって体が震えている

畜生、俺は……何も出来ないのかよ！！

「無理……なのか……？」

自身の非力さを怨み、諦めかけたその時――

「何を諦めかけているんだ、お前は一人じゃあねえんだぞ！」

黒髪の、彼の声が聞こえた

■

「……また死んじまった」

俺は二度目の『死』を体感した

体が凍えていき、やがては『虚無感』に襲われ、視界が闇に落ちていく……こんな怖え思いをしたのは、二回目だ。

たとえ何回死んで生き返ったって、全ての人はこの『恐怖』にはうち勝つ事が出来ない。そんな事も思ったりした

「……また死んだのですか？」

「まあ、な」

そう、一回目は食中毒で無惨な最期を、そして二回目は『ネギま』の世界でstopper？止める者？として、原作ブレイクを止める為に戦い、途中で転生者に殺された……ホント、情けねえよ

……でも、まだ諦めたくない

そんな思いが、俺の胸を締め付ける

「……なら、もう一度やってみますか？ 転生者の戦いを……但し、チャンスはこれで最後です。もう次は無いので、悔いの無いように慎重に進みなさい」

チャンスは最後……か。今度こそ……

「今、『リリカルなのは』の世界で貴方と同じstopper？止める者？が戦っております。相手はチート能力を得た転生者二名。彼だけでは間違いなく死んでしまいます、至急援護に向かいなさい」

「！stopper？止める者？が……ああ、分かった！！」

「それでは、新たな力を授けましょう。
護る為の、新たな力を……」

「ああ、頼む」

そう言つと体から力が溢れ出すような感覚が出て来る

「さあ、行きなさい。世界を救う為に……」

「ああ。有り難うな、俺にチャンス을くれて……『ガブリエル』」

そうして『ガブリエル』と呼ばれた天使は、笑顔で、俺をを送出
つた

「私達守護天使？アークエンジェル？は貴方達を最期まで、天か
ら見守っていますからね……『信道 亮』」

そうして、俺はまた下界へ身を投じた……

辿り着いた場所では、既に戦闘が行われていた

そして、（恐らく）チート能力を持った二人が一人の少年に攻撃
を仕掛けようとしていた

っ、危ない！？ まだ間に合う筈！

「いきなりだが頼むぜ、『エクス』！」

？ああ、此方は何時でもオーケーだ？

……相変わらずの口調だな

「いくぜ！ エクス、セットアップ！」

？Stand by ready・set up・？

透明な球体を天にかざし、俺はバリアジャケットを展開する

青基準の薄手の服にエクスは棍棒、『水月棍』になり俺の右手に握られている

「いつけえええええつ！！！」

力任せに走り出し、彼等の前に棍棒を突き出す

そして今、俺は茶髪の男……同じstopper？止める者？である彼の前に立ち、二人のチート転生者は俺を鋭い目付きで睨んでいる……ソレにしても、この二人の魔力の量。恐らくランクS有るな
そしてstopper？止める者？の方は……ランクEといったところか

こいつ、体震えてるが……大丈夫か？

その時――

「無理……なのか……!?!」

そんな言葉が俺の耳を打った……

無理? 違う、お前は――

「何を諦めかけているんだ、お前は一人じゃあねえんだぞ!」

「!?!」

「お前も世界を救うためにstopper?止める者?になったんだろ? 言つとくけど、お前一人が戦つてるんじゃない。あねえんだ。」

俺の他にも、いっぱい戦つてる奴がいるんだよ。

絶対お前は一人じゃない、だから諦めんな!」

「……!?!」

俺はそう言い、水月棍を構える

「……だから、俺はお前を護る。絶対にな」

ニツと彼に笑いかけ、戦いに身を投じた

■

「……………」

黒髪の男の言葉は、俺の心を強く打った

そうだな……俺は一人で戦っているんじゃない。ルシフェルや、彼等 stopper？止める者？だって、世界を救う為に戦う『仲間』なんだ！！

……さっきまではなんか格好悪かったな、俺

でも、もう俺は――

絶対に諦めない！！

「俺の名前は信道 亮。宜しくな」

「さつさと決着つけるぞ、速水／宮沢」

？『V mode』 起動？

次回、『チートの力』と『亮の覚醒』 TAKE OF

chapter 07 『もう一人のstopper』と『諦めないコロ』（後

はい、この新キャラの能力、既に分かっている方もいらっしゃるかもしれませんよね

今回はそんな彼の能力が判明します

楽しみにっ

それと一つお知らせが

前書きに『原作ブレイク』が好きな方は『もどる』推奨と書いてましたが

ブレイクを避けられない所が出てきたので書き換えました

本つつつ当に申し訳ありませんでした！！

代わりとして主要キャラの『ハーレム』や『管理局アンチ』、
原作キャラへのヘイト』などを無くしたいと思います

申し訳ありませんでした！！

chapter 08 『チートの力』と『亮の覚醒』（前書き）

そういや土曜日の2:45からリリカルなのはstrickersが始まりますね。私は今、ようつべでA・sを見ております

本日は間を空けて連続投稿！

どぞっ

chapter 08 『チートの力』と『亮の覚醒』

「……………話は終わったか？」

銀髪のロン毛がそう言い放ち剣を向ける

「「さっさと決着つけるぞ、速水／宮沢」」

そして『速水』と呼ばれた男もビームサーベルみたいな物を向ける

どちらも、黒髪の男に

「フリーダム！」

「アルテマ」

「「セットアップ！」」

??? Stand by ready・set up・??

すると、彼らは魔力光に包まれバリアジャケットを展開する

「……………私を忘れてほしくないね、場所を移そうか」

「「「「！！？」」「」」

ルシフェルが指を鳴らし、俺達はその場から消えた……………

「……………！ 此処は……………」

「即席で創っておいた空間…………あの銀髪の子が知っているんじゃないかな？」

「ちっ……………」

銀髪のロン毛が舌打ちし、ルシフェルを睨む

「殺るぞ、宮沢」

「ああ……………」

すると突然、二人が黒髪の男に斬りかかる

「おらあっ！」

「死ね！」

しかし黒髪の男は顔色一つ変えず、しかも余裕の表情で棍棒で攻撃を防ぐ

「！？ あんなのをたった一人で……………」

『凄い』、その一言に尽きる

俺も、頑張らないと……………！

その時、彼の棍棒が弾かれた

「!?!」

危ない、今すぐ助けに――

「来るな」

!?! 『来るな』って、何で……

「『護る』って決めたんだ。最後までやり遂げなくちゃな」

「喋ってる暇なんて無いぜえ!!」

銀髪のロン毛がタックルをかまし、黒髪の男を押し倒す

「っ……」

「さあ、死ねよ!」

このままじゃこいつが……

俺は咄嗟にセツトアップし、エアリープで彼を掴み、回避した

「!?!」

「……俺にも、格好付けさせてよ。
それに一人じゃないから」

「ちえ、助けられちゃった……しかも俺が言った事を言われちゃった。俺も情けねえよな」

そんな事無い。すげえ勇敢で、格好良いと思う

「まあ礼は言っとく。有り難うな、俺の名前は信道 亮。宜しくな、亮って呼んでくれよ」

そう言つて、彼は手を差し出す

「俺は神代 一途、宜しく。一途って呼んでよ」

そして俺も手を出し、握手をした

「ところでトオル、そんな装備で大丈夫か？」

そうルシフェルは訪ねる

確かに、彼のバリアジャケットは薄手で一撃でも喰らったら危ないと思う

「それなら心配ないさ。エクス、2ndモード起動」

?okマスター、『2nd mode・Achilles』
起動?

彼の体を蒼い魔力光が包みこみ、白い騎士甲冑が付けられる

そして武器も棍棒から鉄の槍に、左腕には青い盾が付け加えられて、その姿はまさに『騎士』そのものだった

しかしこの姿、なんか何処かで見たことあるな……

「俺の能力、それは『ダンボール戦機』の機体になれるーまあ全部じゃないけど」

ああ、『ダンボール戦機』か

なんかマイナーな気もするけど良いか

「二対二か……付いて来れるか？」

「ああ……勿論！」

? E x c a l i b u r ?

「つたく……お前らウゼえんだよ!!」

■

銀髪の男の声と共に、突然眩い光で作られた斬撃が飛んで来た

亮は一途を突き出し、盾で防ぐも一瞬で碎かれ吹き飛ばされた

「……………くうつつ!!」

「!?!? 亮!!」

更にもう一人の斬撃が、亮を襲った

「ぐあああつ！」

もう彼はボロボロだ。2ndモードでなければ死んでいたかもしれない

「へへっ、効いたぜ……」

彼は槍を地面に付き、立ち上がった

「！？ 無茶だ！」

それに体がもう持たない筈、このままでは亮が危ない

「心配はいらない、俺には奥の手があるからな」

「……終わりだな」

亮を襲った彼らがそう言い、武器を切り替える

速水と呼ばれていた男はライフルを、そして宮沢と呼ばれていた男は槍を構える

二人は亮に狙いを定めた

「……死ねえ！！」

そして弾丸と、槍が亮に放たれた！

「亮—————!!」

一途は叫ぶが、亮はその場を動かない

「諦めてたまるか……俺は……こんな所で死ぬ訳にはいかねええんだよおっ!!!!」

そして、大爆発が彼を包み込んだ

しかし――

?『V m o b e』 起動?

「うおおおおおっ!!!!」

電子音と共に彼の唸る声が聞こえた

煙が晴れたその先には、槍を構えている亮の姿があった。そして宮沢の槍は地面に転がっていた

更に、彼の甲冑は黄金に輝いている

? S u p e r p l a s m a b u r s t ?

自身の槍を天に掲げ、廻す……

すると、段々空気と雷を纏っていき竜巻を起こし、空間内に突風が吹き荒れ始める

「！ 何だ！？」

「この魔力は……！」

速水と宮沢も驚愕の顔を見せ

「すげえ……これが……」

一途も膨大な魔力の前に驚いていた

「超……… プラズマバーストオオオつ！！」

天空に槍を掲げ、竜巻から一点に集まったエネルギー体へと姿形を変える

そしてそのエネルギー体に向かって……

「ぶつ 飛べえええええええつ！！」

鋼の槍を一気に放出するように、突き刺した

エネルギー体は、巨大な『収束魔力砲』となり、速水と宮沢を襲う

「『熾天覆う七つのー』 うわあああああつ！！？」

「な！？ そんな……ぐあああつ！！？」

宮沢が、花弁を転回しようとするが『超プラズマバースト』の速さに追い付けず、速水諸とも喰らいさつき以上の爆発を起こす

「や……………やったのか…………？」

「はあ……………はあ……………」

？『V mode』解除 mode release？

さっきの砲撃の反動で体力を過剰に消耗し、亮は体がフラフラになっている

「こんなに無茶して……………亮、大丈夫か？」

一途は亮に肩を貸し、なんとか立たせる

「あんな大技やって……………体が平気な奴はいると思うか？」

「……………そうだな、チート転生者なら平均じゃない？」

「……………ぷっ」「」

そう言い一途と亮は笑う

「……………逃げた、か」

ルシフェルの言葉に一途が気付き、溜め息を付く

「はあ……………意外としぶといな、チートって」

「まあチートだからな……もつとも、『経験の無さ』が最大の弱点だな……あいつらは絶対的な力に頼って、肝心な所が抜けてたりするからな」

「神である私からすれば、あんなのゴキブリと同類にすぎないんだけどね」

ルシフェルの言葉に、一途と亮は苦笑いする

「……帰るか。亮、うちに来ないか？」

「お、良いのか？ それじゃ頼むぜ」

「その前に、君達の傷を治さないと。エゼキエルが怖いからね」

ルシフェルがそう言うのと、一途達の傷が一瞬にして完治し、自宅へと戻っていった……

■

「ただいま」

「おかえり……って、どうしたのその子は？」

この人が一途の母親……綺麗だな

っと、挨拶しなきゃな

「信道 亮といいます。一途の友達で」

「あら、タカトのお友達ね。さ、家に上がって？ 何時でも歓迎するわ」

そう笑顔で言ってくれて、俺は助かった

そして俺は今日一日、神代家の世話になることになる――

「……一緒に……住む？」

「ちょっと、この辺りを散歩してみようか」

「アーケンジェルのお出ましか」

次回、『亮』と『神代家の日常』 TAKE OF

chapter 08 『チートの力』と『亮の覚醒』(後書き)

次回も戦闘!ではなくぼのぼのと。お楽しみにっ

人物紹介が大丈夫か？ パート3（前書き）

今回は亮の説明！どぞっ

人物紹介が大丈夫か？ パート3

信道 亮 しんどう とあきら 4歳

容姿は黒髪、黒眼と普通

stopper? 止める者?

食中毒で死亡、そして『ネギま』の世界でも転生者に殺害される

ガブリエルの力で『リリカルなのは』の世界に往き、一途と共闘、その後仲間に

残念な事にしゃべり方がテンプレな気がする

デバイス『エクス』

名前は『AX-00』の『AX』から。見た目はCPU『X-00』

『ダンボール戦機』に登場する『LBX』の能力が使用可能（但し山野バンの所有する旧型機体限定。イプシロン、エリシオン使用不可）

1st mode 『zero』

『AX-00』がモデル

蒼い武闘着に、武器は『水月棍』

かなり耐久力が薄い、その分速さに特化している

2nd mode 『Achilles』

『アキレス』がモデル

白と青の騎士甲冑を身に付け、盾が追加。水月棍も『アキレスラ
ンス』に変化

? Super plasma burst? 『超プラズマバースト』

亮の切り札的必殺技であり、『スターライトブレイカー』と同等
の破壊力を持つ収束魔力砲

使用者は、大きく体力と魔力を消耗し使用後は強制的にモードリ
リースされる（現段階では）

チート転生者にこれを放ち、撃退した

? 『V mode』? 『アドバンスドVモード』

窮地に陥った亮が使用した新たな力の一つ

使用時、一定時間、体全体が黄金に輝き魔力と攻撃力が大幅に増加
但、窮地に陥った時のみ使用可能で一回の使用が限界

3rd mode 『???』

詳細不明

ガブリエル

守護天使、四大天使？アークエンジェル？

亮をサポートしている四大天使の一人

二回死んだ亮を転生させ、『リリカルなのは』の世界へ導いた

他にも、四大天使は『ミカエル』、『ラファエル』、『ウリエル』
といる

ちなみにミカエルはルシフェルと双子。性格は正反対

速水 俊介

チート転生者。明るい青髪のポニーテイル

『ガンダム』の能力を創造』できるが、特に目立ったことはせず
超プラズマバースト』の前に破れる

デバイスは『アルテマ』影が薄い

人物紹介が大丈夫か？ パート3（後書き）

亮の3rd modeは大体想像つく方もいらっしゃるかと

それでわっ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5830z/>

stopper ~ 転生者の戦い ~

2012年1月4日15時53分発行